



院長あいさつ



呉羽総合病院 院長
緑川 靖彦

ポストコロナと医療連携

新型コロナウイルス感染のパンデミックに翻弄され続けているこの2年半。私たちの生活は一変しております。新しい生活様式の実践。端的にいうと、“外出を控える”“買い物控える”“会食を控える”“会話を控える”“集まるのを控える”ということを推進するものです。post コロナ、with コロナといった面でも今後も必要そうです。それとともにwebでの会議が一気に増えました。

コロナパンデミックと東日本大震災を対比し

てみますと、東日本大震災から11年経過しましたが、その間、毎年のように、数十年に1度といわれる大災害が各地で報告されました。自然災害に対しては、緊急警報、避難指示、護岸工事、防潮堤など、それなりに対応がなされてきていると思います。一方、今回のような新興感染症のパンデミックに対してはどうだったでしょうか。まさに“無防備”であった、という評価がぴったりと思われまます。病床の逼迫はもちろんのこと、医療崩壊、在宅療養者の死亡、マスク・防護衣・消毒用アルコール不足、さらには感染者への批判、偏見を含む人心の分断といった、人間性の劣化をも指摘できます。医療従事者にも厳しい視線、偏見が投げかけられたこともありました。しかも当院を含め日本の病院の構造や設備が、新興感染症に対して全く対応できていないということが露呈しました。

さらに今回、露見されたものに、わが国の医療におけるデジタル化の遅れがあります。コロナ禍による有事では、その是非はともかくも、オンライン診療など迅速に展開する必要があったにもかかわらず、その普及には時間を要しています。企業によるリモートワーク、テレワークの展開に比べれば、随分と出遅れている感じがします。もっとも医療、介護といった領域は企業の活動と比べれば対極にあることは事実です。

肌と肌のふれあい、面と向かった会話なしには成立しません。そのことが普及の妨げの一要因になった可能性はあると思います。今後の、超高齢社会、人口減少社会を見据えて、デジタル化の普及を加速しなければなりません。それが二次医療圏の連携、情報共有に大いに資することに繋がると思われます。

また、今回、自院のポジショニング、役割というのも改めて気づかされました。コロナ対応には、各医療機関のそれぞれの存在感が示されています。抗原検査からPCR検査、発熱外来、オンライン診療、軽症宿泊施設担当、軽症・中等症入院担当病院、重症を含めた入院担当病院など、それぞれの役割が明確になりました。地域医療構想も一旦、頓挫の状態ですが、コロナ禍に対する役割分担を通して、少しく光明が射した感があります。さらには、このコロナパンデミックが私たちの住まう“地域”というものを図らずも十分に意識させてくれました。地域ごとに新規感染者数、病床逼迫率などが連日報道され、一喜一憂とともに、地域でのワクチン接種など、多職種での協力関係が展開されました。“まだ、いわきも捨てたものじゃないぞ”と、ちょっとばかり思う今日この頃です。皆様、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

地域連携支援室室長あいさつ



地域連携支援室 室長
認定がん専門相談員 社会福祉士
高木 孝子

コロナ禍であっても迅速丁寧な連携と患者様に寄り添った支援

2022年4月1日、当地域連携支援室（旧称：医療福祉相談室・地域医療連携室）は地域の皆様のご支援の下、無事に13年目を迎

えることができました。

今年度、新卒入職者1名を迎え、社会福祉士8名、看護師1名、事務1名の10名で日々業務にあたっております。

主な業務は地域医療連携業務、医療福祉相談業務、入退院支援業務、病床管理（退院）、メディカルサロンの運営であり、コロナ禍でいろいろな制限がある中、感染対策を強化した上で業務を遂行しております。

地域医療連携業務は、地域の医療機関等からご紹介された患者様が円滑な診療を受けられるように迅速丁寧な連携を心掛けております。お陰様で年間約1,500件以上のご紹介を頂いております。また、当院から各医療機関への紹介も年間約1,200件程あり、快くお引き受け頂いておりますことに感謝申し上げますと共に地域医療の連携が強化されていることを実感しております。

医療福祉相談業務は、年々、多重問題ケースが増えて複雑化していると感じます。社会福祉専門職としてあらゆる社会資源を活用し患者様、ご家族様に寄り添った支援を心掛けております。

入退院支援業務は、チーム医療を大切に担

当ケアマネジャーと連携を密に取り、スムーズな入退院ができるように、病床管理（退院部門）業務は、外来・病棟と日々の入退院を把握することで、入院が必要な患者様のベッドを確保できるように努めております。

メディカルサロンは地域の方々の癒やしのサロンとしてご利用頂けますよう勉強会や理学療法士による体操などを取り入れ工夫して運営して参りました。コロナ禍でお休みが続きましたが、昨年12月は感染対策を徹底して再開することができました。現在はまた、お休みになってしまい「すまいるカフェだより」で対応しております。

コロナ禍であっても、当院の基本理念である「すべてのひとを、笑顔にするために」の実現のため、また、いわき南部地区での当院の役割を果たすために、地域の医療・介護関係機関と積極的に連携を図り、患者様・ご家族様がその人らしく住み慣れた地域で暮らしていけるように支援して参ります。引き続き、皆様のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

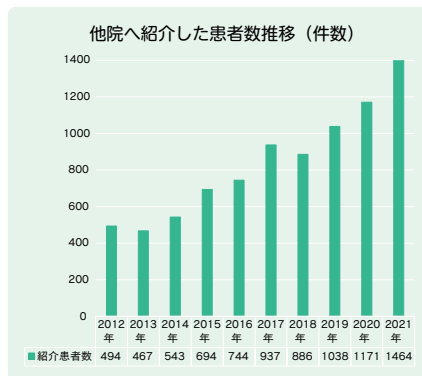
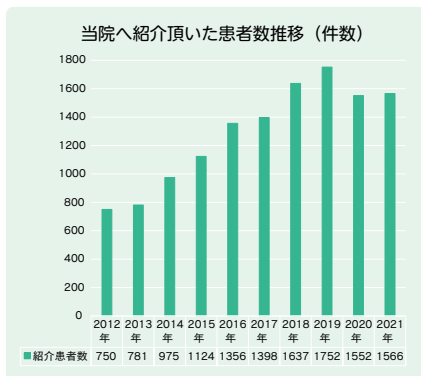
地域連携支援室紹介①

新体制の地域連携支援室



社会福祉士 8 名、看護師 1 名、事務員 1 名

おかげ様で年間 1,500 件以上のご紹介を
いただけるようになりました!! 連携強化を実感!



※2020年、年間200件以上の紹介を頂いていた
クリニックが閉院

地域連携支援室 新任紹介



医療ソーシャルワーカー
佐川 仁志

4月より地域連携支援室で勤務することになりました佐川仁志と申します。まだまだ未熟者ですが、日々の研修や先輩方から多くの事を学び、1日でも早く医療ソーシャルワーカーとして活躍できるよう努力して参ります。どうぞ宜しくお願いいたします。

医療連携について



地域連携支援室
リーダー
医療ソーシャルワーカー
齊藤 良

いわき市南部地区の中核病院として地域の病院、クリニック、施設と密に連携を取り、患者様が切れ目のない医療を受けられるよう努めております。また、スムーズに受診、受療ができるよう迅速かつ正確な対応を心掛けております。

業務内容として中心となるのが病診連携、病病連携です。ご紹介患者様の受診予約や受診案内を行います。さらに受診後の報告書の送受信、情報提供依頼の対応なども行います。

当室の医療連携スタッフは社会福祉士の資格を持っており医療ソーシャルワーカーとして外来での相談、制度の案内なども対応しております。

これらの業務は院内外との連携がとても大切です。以前は顔の見える連携として南部地区の病院やクリニック、施設のスタッフが集まる連携の集いを開催しておりました。また病院やクリニックへあいさつ回りを行い、関係を強め、スムーズなやり取りを可能としておりました。現在はコロナ禍において顔を合わせることは難しい時期となっていますが、これまで構築してきた関係性があるため、現在もスムーズな連携が可能となっています。

これからも患者様の安心安全のために医療連携を行っていかれると思います。

医療福祉相談について



地域連携支援室 リーダー
医療ソーシャルワーカー

日向寺 大介

病気やケガをすると、普段では考えもしなかった心配事や不安が生じることがあります。医療福祉相談では、外来通院・入院患者様やそのご家族が抱えるさまざまな問題解決のお手伝いをしています。

院内の医師や看護師、専門スタッフはもちろん、他の医療機関や公的機関、介護・福祉施設などの各種関連機関とも連携し、安心して治療に専念できるように支援しております。

コロナ禍において病院の面会制限があり、相談面接を対面で行う機会が減少してしまい、独居や高齢者のみ世帯の患者様やご家族が遠方である場合の支援が難しくなっております。非対面のコミュニケーション

ン方法も駆使しながら、患者様やそのご家族のニーズを把握し問題が解決できるように支援をする事が求められております。

新型コロナウイルス感染症の収束は長い道のりであるとも言われています。私たちは常に状況の変化に合わせて支援の方法を見直しながら最善を尽くしていきたいと思っております。



地域連携支援室紹介②

入退院支援について



地域連携支援室 主任
医療ソーシャルワーカー

船生 裕明

入院時にスクリーニングシートを基に支援が必要な患者様の抽出を的確に行い、カンファレンスに参加し主治医や担当看護師、リハビリ担当者等と情報を共有しています。

患者様やご家族との面接を通じて、今後の退院に伴い生じる問題点や生活について、社会福祉の立場から、寄り添いながら情報提供や助言を行っています。

在宅生活や介護を希望される場合には介護保険サービス利用を基本に、居宅介護支援事業所のケアマネジャーとの連携を図る事で円滑に在宅へ戻れるように支援しております。

また入院をきっかけに要介護状態になる方も多く、介護保険申請の手続き案内や、

新規のケアマネジャーの選定の支援も行います。諸事情で在宅介護が困難な場合には施設等のご案内をすることもあります。

患者様やそのご家族の意向を確認の上、該当する施設の情報提供を行い、入所に至るまでの調整を行っていきます。

コロナ禍が依然継続しており、面会制限もある事から、大変な事も多いですが、今後も患者様及びご家族に寄り添いながら、チーム医療で入退院支援を行って行きたいと思っております。

入退院支援看護師の役割について



地域連携支援室
入退院支援看護師

神山 由美

入退院支援看護師の役割とは、病気や障害を持った外来通院中や入院中の患者様が、地域で安心して療養生活を送ることができるようサポートする事です。

具体的には、入院した患者様について、ご家族と面談し、現在の病状や入院前の生活等についてお聞きし、今心配なことはないか確認し、安心して入院生活を送ることができるようサポートしています。治療やご本人の状況を見て、医療ソーシャルワーカーと共に退院後の生活を見据え、本人と家族の希望をお聞きます。

医師、病棟看護師をはじめ多職種と連携を図りながら退院後に医療や介護の支援が必要か、必要な場合は手続き等の説明、訪問診療、訪問看護、ケアマネジャー等と連

携し退院後の療養先の決定をしていきます。

現在はコロナの影響で面会制限があり、患者様とご家族がコミュニケーションを取りづらいこともあり、患者様の状況把握ができない、家族が遠方の場合手続きが難しい、在宅介護実態調査も看護師の伝達によるもので患者状況が見えにくいなど問題点があります。できる限りご家族やケアマネジャーとの連絡を密にし、患者様の現状が確認できるようにリハビリの状況の見学等を感染対策を徹底して対応しています。行き届かない点もあると思いますが今後も患者様、ご家族が安心し、療養できる納得した結果になるよう精進してまいります。

病床管理について(退院調整)



地域連携支援室 主任
医療ソーシャルワーカー

加藤 美樹

病床管理は限られた病床を効率よく運用することが求められます。

病床の利用状況、患者さまの入退院や転棟・転出を把握し、それぞれの状況に応じた病床の確保に努め、関係部署の調整を行いながら病床を効率的に運用しています。

病床管理の目的は大きく2点あると考えられます。1つ目は地域の医療ニーズに対応するために出来るだけ多くの患者さまの受け入れを行い、病状に応じた適切な医療を提供出来るよう病床を確保すること。2つ目は病床の稼働率の目標を達成維持し、病院経営を支えることで地域医療に貢献することです。

特に入院を断らないで地域医療に貢献するという病院の役割を果たすことは重要で

あると考えます。

医療ソーシャルワーカーとしての病床管理は患者さまの社会的な把握も求められており、在宅での環境や家族背景なども把握して連携を図ることに努めております。健全な病床管理は患者様のためになり、それが病院経営の安定にもつながっていると考えます。



病床管理会議の様子

厚労省医療対話推進者研修終了

地域連携支援室 事務
高橋 みどり

地域連携支援室事務員として当該事務とデータ管理を主にしておりましたが、この度、厚労省医療対話推進者研修を終了いたしましたので、患者サポート窓口担当者として、仕事の幅を広げて行きたいと思っております。よろしくお願いいたします。



地域連携支援室紹介③

メディカルサロン・すまいるご紹介

「メディカルサロン・すまいる」はがんと診断された方、治療を受けている方、そのご家族さま、がん以外の慢性疾患でお悩みの方の自由な交流の場として、2015年5月に開設致しました。2022年4月の時点で205回開催、延べ約1,800人の方々にご利用して頂いております。

2020年の3月から新型コロナウイルスの影響でお休みが続き2021年の12月に約2年ぶりに人数制限、コロナ問診表の活用、マスク装着、換気などの感染対策を十分にとった開催となりました。

残念ながら現在はお休みですが、多職種で作成した「メディカルサロンお便り」を送付して対応しております。

(ホームページより閲覧できます。<https://www.kureha-hosp.jp/>)

今後も状況に応じて運営して参りたいと思います。緑川院長をはじめ、がん性疼痛看護認定看護師、認定がん専門相談員、福島県緩和ケア研修会を終了した医療ソーシャルワーカー、理学療法士などが対応しております。どうぞ宜しくお願い致します。

2021年感染対策を徹底し再開
緑川院長の講話



2021年感染対策を徹底し再開
理学療法士と

第13回集合写真



第20回連携のつどいリモート開催
「新型コロナウイルスについて」

コロナ禍前のサロンの様子



メディカルサロンの取り組みを発表し
「部門賞」を受賞



グループワークで地域の
問題点をディスカッション



連携のつどいの取り組みを発表し
「最優秀賞」を受賞



いわき南部地区在宅医療連携のつどい及び合同研修会について

在宅医療を担っている多職種が情報を共有し、顔の見える連携を図る目的で2010年3月に第1回いわき南部地区在宅医療連携のつどいが開催されました。

その後、合同研修会として緑川院長をはじめ、たくさんの医師やコメディカルの講演でグループワークを行い、顔の見える関係を築いてきました。

いわき医師会勿来ブロック・勿来田人地区包括支援センター・介護支援専門員勿来支部共催で年に2回開催され毎回100名以上が集まります。連携支援室をはじめ呉羽会のスタッフは縁の下の力持ち的事務局の役割を担っております。

2019年11月に19回を迎えましたが、その後コロナ禍でお休みを余儀なくされ2021年8月には何とか20回目をリモート開催で再開することができました。

今後も感染状況を考慮しながら続けて行けるように努力して参りますので、ご協力ご支援の程宜しくお願い致します。

新任医師紹介



循環器内科部長
名取 俊介

北海道出身、旭川医大卒です。オーダーメイド医療を心掛けております。東北地方は初めてですので、地域性とか全くわかりませんが、北海道で培ってきた地域医療がお役に立てましたら幸いです。よろしくお願いたします。



総合診療内科部長
鈴木 智毅

千葉県出身、東京慈恵会医科大学を卒業。臨床研修を終了後、10年以上、心臓カテーテル治療とその臨床研究、その後ロンドンでGP(日本で言う、かかりつけ医)として3年間の海外勤務を経験しました。帰国後、公立種子島病院を皮切りに、鹿児島、宮崎で地域医療に携わっていました。宮崎県延岡市はいわき市とは兄弟都市で江戸時代に共通の藩主、内藤公を有するという歴史的な絆があります。親近感をもってもらえると嬉しいです。



整形外科医師
吉田 文哉

岡山生まれ、千葉育ち、大阪で医師免許を取得し、実家は東京、ここ福島で結婚しました。今までは救命医として働いていましたが、整形外科としての腕を磨きたいと思いこちらに赴任させて頂きました。患者さんに害をなさないこと、最善の医療を提供することを心掛けています。全力を尽くしたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

地域連携支援室

- TEL. 0246 - 63 - 2181 【代表】内線 2161
- TEL. 0246 - 62 - 3178 【直通】
- FAX. 0246 - 62 - 2035
- E-mail renkei@kureha-hosp.com
- <https://www.kureha-hosp.jp/>

■発行 社団医療法人呉羽会 呉羽総合病院
〒974-8232 いわき市錦町落合1番地-1
TEL. 0246-63-2181
FAX. 0246-63-0552
URL <https://www.kureha-hosp.jp/>
発行人 田中 稔
編集 地域連携支援室